神戸国際大学
キリスト教センター通信　第 126 号
2025 年 1 月 21 日

「1 月 17 日によせて」

キリスト教センター ミカエル 加藤俊彦

1995 年 1 月 17 日に阪神淡路大震災が起こってから今年で 30 年の年月が経ちました。その間、学院や大学のチャペルでは、また神戸の教会では、毎年毎年絶やすことなく、1 月 17 日に、あるいはその近くの日に、大震災の犠牲者を記念して祈り続けてきたと思います。

「記念」とは、過去の人や出来事を忘れないように思い起こすこと、という意味です。つまり、30 年前に起こった阪神淡路大震災で犠牲となって亡くなった方々、また大震災そのものを忘れないように思い起こすこと、それが一般的な意味での「記念」です。しかし、キリスト教で言うところの「記念」とは、それだけではありません。記念するとは、過去の出来事が今に影響をもたらし、今に意味を与えているということを解き明かすことです。つまり、大震災の犠牲者が今を生きるわたしたちに何らかの影響をもたらしている、あの時の出来事が今を生きているわたしたちに何らかの意味を与えているということに気付き、解き明かすこと、それが、大震災を記念して祈っていることの意味です。

この礼拝では、大震災の犠牲者となった、当時附属高校 3 年生の原田昌彦さんと 2 年生の野田宏一さんを記念して祈ります。その意味は、当時 16, 17、18 歳という若さで逝去されたお二人を忘れないようにしましょう、彼らの魂の平安を祈りましょうということに留まりません。彼らと今を生きるわたしたちとがつながらないと、「記念」していることにはなりません。彼らを記念するとは、彼らが今わたしたちのすぐそばにいて、今を生きるわたしたちに意味や影響をもたらしていることに、私たちが気付くことです。

今この礼拝で彼らの名前を憶え記念して祈るとき、お二人がわたしたちのすぐそばにいると信じます。そして、彼らが、今を生きるわたしたちに気付かせようとしている内容は、「わたしたちが当たり前と思っていることは、決して当たり前のことではない」ということだと思います。昨日生きていたから、今日も当然生きていられるという訳ではないということ、今日を迎えることができたから明日という日も当然またやって来るとは限らないということです。わたしたちにとって、日々の暮らしも、今生きている命も、人生という時間も、一瞬の内に崩れ去り、わたしたちの手の内からなくなってしまうような不確かなものであるということです。

すべては、当たり前にやってくるものではなく、当然のごとくあるものでもなく、お恵みであるということ。だからこそ、昨日生きられたことに感謝し、今日生きていることに感謝し、命があることに感謝し、人生を歩んでいられることに感謝する必要があります。そのことを、原田さんも野田さんも、30 年という時間を超えて、わたしたちに気付かせようとしているのだと思います。

過去の事柄を記念するとは、過去の人々や出来事を忘れないように思い返すことだけではなく、過去の人々を今に生き返らせること、過去の出来事を今に活かすこと、過去と今とを繋げることによって、私たちが今いかに生きるかを見定めるためであることを、改めて覚えておきたいと思います。

（2025 年 1 月 16 日震災記念礼拝におけるメッセージより）